[論文]

「メキシコ・グアダルーペの聖母」研究について

川　田　玲　子（愛知県立大学非常勤講師）

1．はじめに

一般に「グアダルーペの聖母崇拝は、16世紀中葉にインディオのあいだで普及した」と考えられてきた(1)。これに対して「インディオばかりではなく、スペイン系の人々の崇拝でもあった」という見方が強まり(2)、特に1981年の聖母「出現」450年記念を機に(3)、新たに聖母崇拝に関する史料集が出されるなど歴史学者からも注目され、近年はさらに新しい見解も提唱されはじめた。1986年には歴史学者エドムンド・オゴールマンが「ひとりのスペイン本国人神父の手によって仕掛けられたグアダルーペの聖母崇拝は、まずスペイン系の人々のあいだで広まり、17世紀になって広くインディオに普及した」と論じ(4)、1996年には米国人スタッフォード・プールが「1648年のクリオージョ神父の説教によってグアダルーペの聖母物語が誕生し、聖母崇拝が成立した。さらにインディオの聖母崇拝は18世紀に入ってのことであった」と唱えた(5)。

本稿では、まずグアダルーペ研究の基礎となっているいくつかの史料、17世紀から20世紀までのグアダルーペの聖母崇拝関連の事象およびフランシスコ・デ・ラ・マサからオゴールマンを経てプールに至るまでの研究を紹介し、次いでグアダルーペの聖母崇拝に関する見解を考察したい。

2．基本史料

まず、グアダルーペの聖母研究の基本史料としては、16世紀に書かれたものがいくつかあるが、それはインディオが残した史料とスペイン系の人々が記した史料のふたつに分類される。インディオ系の史料は、絵図、ナワトル語で書き留められた物語風詩、遺言などである(6)。スペイン系の史料としては、スペイン本国人の新大陸旅行記や年代記、遺言、書簡、公文書などである(7)。ここでは聖母崇拝研究の基礎と考えられる、聖母物語に関係の深いナワトル語史料３点と、当時の崇拝の実状が間接的ではあるが把握できるスペイン系の人々が残した３種類の公文書を簡単に紹介してみたい。

現在まで続いている「グアダルーペの聖母物語」の概略は、以下のようになっている。

「1531年12月8日から12日にかけて、テペヤックの丘に聖母マリアが姿を現した。先住民フアン・ディエゴの前に現れた聖母は、自分のために寺院を建設するよう当時のメキシコ司教、スマラガ神父に伝えよと命じた。そこでディエゴは聖母の言葉を司教に伝えたが、司教はその話に疑いを持ち、なにか証を持ってくるよう、ディ

エゴに約束させた。司教の言葉を聖母に伝えると、聖母はディエゴに丘に咲くバラの花を摘み、司教へ届けよと命じた。司教が見つめるなか、バラを包んでいたマントを静かに開くと、不思議にもそこには聖母の絵姿が現れたのであった」(8)

物語と関係があると考えられるナワトル語の史料のひとつが *Teponaxcuicatl* (*El pregón del atabal*,『アタバールの響き』)である(9)。これは、フェルナンド・デ・アルバ・イシュトゥリルソチトゥルが1648年に複写し終えた史料集（絵文書および肉筆本等）の中に含まれており、フランシスコ・プラシドというアツカポツァルコの領主が作者と言われている(10)。1531年か1533年頃に詠まれた250語ほどのナワトル語による物語風の詩で、口承されていたと言われ、16世紀終わり頃にこれらが収集されて、文字に残された。現在では Cantares mexicanos（メキシコの里謡）と呼ばれているものである。これらの詩は1890年に米国人C.ブラインントンによってAncient Nahuatl Poetry として紹介され、続いて1904年にアントニオ・ペニャフィエールが、16世紀末に記録された Cantares mexicanos の手書き原本を写真収録し、複写版にした(11)。この手書き原本が初期の口承内容をそのまま伝えているかどうかは明らかではない。グアダルーペの聖母像がメキシコ市の大聖堂からテペヤックの丘に運ばれたときに始めて歌われたもので、登場人物などの氏名は記されていないが、聖母像が司教の目の前で布地に浮かび上がったことなどが語られている(12)。

つぎの文献 *Inin huey tlamahuçoltzin* (*La relación primitiva de las apariciones*,『出現に関する初期の物語』)は、700語ほどの物語で、マリアーノ・クエバス神父がメキシコ国立図書館所蔵の手書き文書のなかから発見し、1930年の*Álbum histórico guadalupano del IV Centenario*（『聖母出現400周年記念集』）で紹介したものである(13)。歴史文献学者でナワトル語の権威であったアンヘル・マリア・ガリバイ神父が、その文体から後述のアントニオ・バレリアーノ作『グアダルーペの聖母出現の物語』より古いものであるとし、書かれた時期は1541－45年頃と推定されている(14)。今日の「グアダルーペの聖母物語」に出てくる登場人物の名前などは記されていないが、物語の舞台にテペヤックの丘が登場し、聖母マリアがインディオ青年や大司教の前に現れる、というあらすじは上述の聖母出現物語とよく似ている(15)。

第三の文献は、*Nican mopohua* (*Historia de las apariciones de Ntra. Sra. de Guadalupe*,『グアダルーペの聖母出現の物語』)で、5000～6000語からなり、16世紀中葉に書かれたと言われている物語である(16)。内容に関しては、大筋および登場人物の名前などが、現在のグアダルーペの聖母物語とほぼ一致する。この物語は、1649年に当時グアダルーペの聖母教会の司祭であったルイス・ラッソ・デ・ラ・ベガが、Huei tlamahvizoltica (El gran acontecimiento,『神聖なる出来事』)という題で発表した物語と中身が全く同じで、どちらかがコピーということになる。17世紀の文学者シグエンサ・イ・ゴンゴラが、この物語の作者は16世紀のインディオ、アントニオ・バレリアーノであるとしたことから、バレリアーノが作者とされてきたが、近年ラッソ・デ・ラ・ベガが作者である、という新たな説も提唱されている(17)。

以上3点は、内容からいわゆる伝承の聖母物語と関係があると考えられている物語であるが、ナワトル語の史料に関してはいくつかの問題がある。口承であったため、記録の内容が当初の物語と異なっている可能性があり、またスペイン語訳に間違いがある(18)。そのため、語り始められた年代の確定が難しく、これらの史料をもとに崇拝の成立や初期の状況を把握

しようとする場合には注意を要するであろう。

つぎにスペイン系の人々が残した何点かの公文書を検討しておこう。

最も重要な文献は、*Información de 1556*（『1556年の調査報告書』）であろう(19)。この報告書は13項目の質問と9名の証人による回答で構成されているが、それはつぎのような経緯によって作成されたものである。1556年9月8日、聖フランシスコ会の管区長であったブスタマンテ神父は、その2日前の9月6日に第二代メキシコ大司教モントゥファルがメキシコ市の聖フランシスコ教会でおこなったミサの内容を批判した。大司教が正式には認められていないグアダルーペの聖母崇拝を奨励したことに反対したのである。これに対し大司教は、9月8日のブスタマンテ神父の言動を報告書にしてアウディエンシア（控訴裁判所）に提出し、神父の言動に行き過ぎがなかったどうかの判断を仰ごうとした。したがって、この報告書はブスタマンテ神父の言動を明らかにすることを目的としたものであり、崇拝の是非については直接問われてはいない。しかし、大司教が作成したブスタマンテの言動に関する質問と、それに対する証言などから、当時のグアダルーペの聖母崇拝の状況を間接的に知ることができる(20)。

まずテペヤックの丘に教会堂が存在していた事実である(21)。当時そこには教会付きの司祭はおらず、別の教会から神父が定期的に通って、ミサをおこなっていたことが記述されている。そこには聖母マリアの絵姿が祀られており、グアダルーペの聖母と呼ばれてれていたことも記録されている。教会の名も既に「グアダルーペの聖母教会」となっており、大司教自らが出向いてインディオを前にミサをおこない、その際グアダルーペの聖母について何らかの話をしたようである。またグアダルーペの聖母は奇跡を起こし、病気を治すという噂が広がっていたことなどが明記されている。ブスタマンテ神父は「この崇拝には根拠がない」と崇拝を戒め、さらに「聖母の絵姿はマルコスという名のインディオが描いたものであり、インディオがアステカ時代の偶像崇拝と区別できなくなる危険もある」と心配している様子が記されている。ただしそれに対する反論は全く見られないうえ、先に述べた、現在まで伝えられている有名なグアダルーペの聖母物語についても何ら記述はない。

その他、スペイン本国を知る人々のグアダルーペの聖母に関する見方も記されている。マドリードのアトーチャの聖母の教会に行っているようだ、という具体的な表現もみられ、この時期、スペイン系の人々がスペイン本国の聖母マリアを思いおこしている様子が記されている。

第二の重要な史料としては、メキシコ市参事会（カビルド）の議事録がある(22)。第一回市参事会（1524年3月8日）以降1600年までに開かれた約6000回分の市参事会議事録を見てみると、グアダルーペの聖母の名が最初に記録されているのは1566年5月8日で、既にグアダルーペの名の付いた教会堂が存在していたことが分かる。1571年5月8日の議事録では、グアダルーペの聖母のコフラディーア（信心会）がスペインへ送金した記述が見られ、少なくともこの日付以前に、グアダルーペの聖母のコフラディーアが設立されていたことになる(23)。その他にも数十回にわたり、議事録にその名が記されているが、主にその付近の街道整備や住民による参拝などが議題となっている。またグアダルーペの聖母の家（casa de la Nuestra Señora de Guadalupe）に副王が宿泊したようであり、そのための指示も記録として残って

いる(24)。

議事録によれば、市参事会では宗教上の祝いのための祭事の内容が指示されたりするようで、例えば1528年7月31日付では、サン・フアン、サンティアゴ、サン・イポリト、ヌエストラ・セニョーラ・デ・アゴストなどの祝いの日の祭事の内容や、祝いのための補助金の額などが記されており、その後も随時検討されている。しかし16世紀の議事録にグアダルーペの聖母の祝いの日については記録されておらず、当時市参事会はグアダルーペの聖母の祝いの日の祭事に関与していなかったことが推測される。

第三の史料としては、第四代副王（1568－80）マルティン・エンリケスが、1575年にスペイン国王フェリーペ二世宛に書いた書簡がある(25)。同書簡から明らかになることは、まず1555年あるいは1556年に小さな教会堂がテペヤックに存在していたことである。その教会に通っていたおかげで病気が治癒したと、ある牧場主が人々に話したので、それ以降その教会の聖母への信心が広まったこと、また「スペインのグアダルーペの聖母と似ていたのでこの教会の聖母がグアダルーペの聖母と名付けられた」とも書かれている。

さらには、グアダルーペの聖母のコフラディーアが作られ、1575年には既に400名の会員が集まっており、彼らの寄付で教会堂その他の建物が建設され、また大司教がその教会に2名の聖職者を配属し、場合によってはもう1名増やすことを考えている、などと記述されている。市参事会議事録にも副王エンリケスの国王宛書簡にも、「グアダルーペの聖母のコフラディーア」としか記されておらず、これはスペイン本国のグアダルーペの聖母のコフラディーアを指しているという研究者もいる。アリシア・バサルテによれば「インディオによるグアダルーペの聖母のコフラディーアが1675年にはじめて作られた」らしい。だとすれば、16世紀に存在したグアダルーペの聖母のコフラディーアは、スペイン系の人々のコフラディーアであることが推測される(26)。

以上のスペイン系の人々による公的史料は、聖母物語には直接触れてはいないが、聖母崇拝の貴重な証言であり、いくつかの事実の年代等を実証している。少なくとも1556年には既にテペヤックの丘に教会堂があり、詳細は描写されていないが、グアダルーペと呼ばれた聖母の絵姿が祀ってあったことがわかる。崇拝はまだ正式には認められていないようだが、その絵姿がメキシコ市およびその周辺で、インディオ系の人々のみならずスペイン系の人々からも崇められていたことが明らかになろう。

3．17世紀以降の主な出来事と研究

つぎに17世紀から20世紀前半までの主な出来事および20世紀後半から現在までのグアダルーペの聖母崇拝に関するいくつかの研究を見ていきたい。

1556年に始まったモントゥファル大司教とブスタマンテ神父の対立は、曖昧のまま自然消滅したが、およそ1世紀を経た1648年、同年のグアダルーペの聖母の祝いの日のミゲール・サンチェス神父の説教が活字となった。それは Imagen de la Virgen María Madre de Dios de Guadalupe milagrosamente aparecida en México（『メキシコ市に奇跡的に出現した神の母、グアダルーペの聖母』）と題する、グアダルーペの聖母物語としては初めての印刷物で

あった(27)。サンチェス神父はグアダルーペの聖母の出現を詳細に語ったのみならず、聖母がメキシコで生まれたクリオージャであるという、聖母の新しいイメージ―クリオージョのシンボル―を創った。そしてこれ以降、ラッソ・デ・ラ・ベガをはじめとするクリオージョ神父のグアダルーペの聖母を扱った説教が続いて印刷された(28)。

1666年になるとフランシスコ・シリス神父が *Información de 1666*（『1666年の調査報告書』）で、インタビューという手法を用いて、グアダルーペの聖母出現の立証を試みている(29)。1737年にはグアダルーペの聖母は「メキシコ市の守護聖母」という称号を与えられて、メキシコ市およびメキシコ・カトリック教会から正式に認められ、1746年には副王およびメキシコ大司教から「ヌエバ・エスパーニャの守護聖母」の称号を与えられ、また1754年にローマ法王にグアダルーペの聖母崇拝とその物語が認められた(30)。ここにいわゆるグアダルーペの聖母崇拝が正式に確立したのである。

しかしその後も、アパリシオニスタ（aparicionista 1531年12月12日の聖母出現擁護派）とアンチアパリシオニスタ（antiaparicionista 1531年12月12日の聖母出現否定派）とのあいだで、宗教上の論争は続いている。1794年にはセルバンド・テレサ・デ・ミエール神父が、グアダルーペの聖母は既に先スペイン時代に出現していたという新説を提唱し(31)、1883年にはホアキン・ガルシア・イカスバルセータ神父が詳細な史料を分析した結果、グアダルーペの聖母が1531年12月12日に出現した形跡は見られないと結論づけ、聖母出現否定説を支持した(32)。

グアダルーペの聖母崇拝に関する史料収集が本格的に始まったのは19世紀末のようで、1887年アメカメカの主任司祭であったフォルフィーノ・イポリト・ベラがTesoro guadalupano(『グアダルーペの聖母崇拝宝典』)と題する、その大半が聖母関連の資料である約400ページの解説集を出版した。これは副題に「グアダルーペの聖母の出現および崇拝に関する文献の解説」とあるように、誰がどの史料のどの部分を引用したかにいたるまで、詳細に収録・解説されている(33)。翌1888年には、グアダルーペ大寺院の司教座聖堂参事会員のアンドラーデ神父が、大司教モントゥファルの『1556年の調査報告書』を初めて活字で世に送り出した(34)。聖母出現400周年を記念して1930年には、マリアーノ・クエバス神父は前述の『聖母出現400周年記念集』と題したグアダルーペの聖母崇拝関連史料集を出版した。そこには発見したばかりのナワトル語の史料も含まれていたことは既に記した。翌1931年、ヘスス・ガルシア・グティエレス神父も、*Primer siglo guadalupano. Documentación indígena y española, 1531-1648*（『グアダルーペの聖母崇拝最初の世紀、インディオとスペイン系の人々の史料（1531-1648）』）という史料集を出している。この時代の聖母崇拝関連の史料研究は、もっぱら宗教関係者の努力によるものであった。

近代的な歴史学の立場から聖母崇拝研究が始まったのは、20世紀の中葉になってからで、その先頭に立ったのが美術史家兼歴史家、フランシスコ・デ・ラ・マサであると言えよう。マサは1953年のEl guadalupanismo mexicano(『メキシコのグアダルーペの聖母崇拝』）で、グアダルーペの聖母崇拝がどのように成立・発展してきたかを論じている。マサの研究の特徴は、グアダルーペの聖母崇拝がインディオのみでなくスペイン系の人々のあいだでも広まっていたことを指摘していることであろう。

その21年後の1974年にフランス人ジャック・ラファーユは、著書 *Quetzalcoatl y Guadalupe*(『ケッツァルコアトルとグアダルーペ』)を出版した。副題を「メキシコにおける国民意識の形成」とし、グアダルーペの聖母をケッツァルコアトルとともに「メキシコ人のアイデンティティーの形成」のための重要な要素として論じた。ラファーユの研究の特徴は、スペイン系の人々を本国人と植民地生まれのスペイン人（クリオージョ）というふたつのグループに分け、それぞれがグアダルーペの聖母とどのように関わっているかを分析している点である。本書が書かれた背景には、70年代のメキシコ・ナショナリズムの高揚があったと思われる。

グアダルーペの聖母出現450周年という記念すべき1981年に、メキシコ・カトリック教会は、*Álbum de 450 años de las apariciones de Nuestra Señora de Guadalupe*(『グアダルーペの聖母出現450年記念集』)を出版した。執筆者のひとりであるエルネスト・デ・ラ・トレ・ヴィジャールは、翌年、 *Testimonios históricos guadalupanos*(『グアダルーペの聖母崇拝の資料集』)を出版した。全文1500ページ程のこの史料集には16世紀から19世紀の30点ほどの資料が掲載されており、1531年のナワトル語の『アタバールの響き』のスペイン語訳の全文紹介や、その他、ナワトル語初期の物語のスペイン語訳を収録している(35)。この書はアパリシオニスタの立場で物語の聖母出現を支持し、暗にグアダルーペの聖母崇拝は16世紀にインディオの間で始まったと印象づけるものであるが、聖母研究者にとって貴重な資料集であろう。

1986年、エドモンド・オゴールマンは『1556年の調査報告書』を詳細に分析して、*Destierro de Sombras*(『謎の解決』)を書いた。クリオージョの聖母崇拝の成立を研究している点は先の研究者と共通であるが、全く新しい視点から聖母崇拝の起源に言及している。従来の崇拝起源の研究は、聖母出現の有無や聖母物語誕生の期日を立証しようとしてきたが、オゴールマンは、いつ、誰が、何のためにグアダルーペの聖母崇拝を始めたのかを解き明かそうとした。

翌年（1987年）になり、エンリケ・フロレスカーノが先スペイン時代から20世紀にいたるまでの重要な史料をたどり、*Memoria mexicana*(『メキシコのメモリー』)を書き、グアダルーペの聖母を植民地時代の代表的イメージとして取り上げた。彼もラファーユと同様に、崇拝がクリオージョのアイデンティティーの探求に欠かせない要素となったとみなし、サンチェス神父を代表とするクリオージョ神父の努力がどのような形で崇拝の普及に影響したかを考察した。

1996年には米国人プールが従来の研究を厳しく批判した *Our Lady of Guadalupe*(『グアダルーペの聖母』)を書いた。彼はグアダルーペの聖母崇拝が1648年のサンチェス神父の説教とともに確立したとし、1648年以前の史料には信憑性がなく、それらの史料に基づいて聖母崇拝を語ることはできない、という全く新しい見解を出した。

4．グアダルーペの聖母崇拝をめぐって

ここでは、近年の研究者がグアダルーペの聖母崇拝をどのように捉えているのか、その論拠を比較しながらみていきたい。それぞれの見解を整理するに当たり、主に第二章で紹介し

た基本史料をどのように評価しているか注目していくことにする。本稿で取り上げた研究者は、基本史料6点のうちメキシコ市参事会議事録を史料としては扱っていない。しかし筆者は、どの程度公に認知されていたかについては、植民地時代に宗教的な行事に関する決定権を持っていた市参事会がグアダルーペの聖母崇拝をどのように扱っていたか考察する必要があると考え、敢えて紹介した。そこで市参事会議事録を除いた他の5点が主な対象となることを記しておく。

聖母崇拝の普及に大きく貢献したと考えられる「グアダルーペの聖母物語の成立」時期を、ナワトル語の史料を根拠として、16世紀であるとする研究者と、1648年のサンチェス神父の説教を聖母物語の原形として、17世紀であるとする研究者に分かれる。16世紀説をとっているのは、トレ、マサ、オゴールマンである。

トレは、1531年の聖母出現と同時にグアダルーペの聖母物語が伝承され始め、それと同時にグアダルーペの聖母崇拝が興ったとする(36)。いわゆるアパリシオニスタの立場をとっている。第二章で紹介した基本史料、『アタバールの響き』をはじめ、残存するグアダルーペの聖母に関連するすべての史料を論拠として紹介している。またグアダルーペの聖母を崇拝していた人々については、ヌエバ・エスパーニャに居住していたあらゆる階層の人々であった。

同じく16世紀説をとなえるマサの論拠は、『グアダルーペの聖母出現の物語』の作者を16世紀中葉の実在の人物バレリアーノとする点にある(37)。『アタバールの響き』は原稿が紛失しており史料としての信憑性を欠き、『出現に関する初期の物語』は1648年のサンチェス神父の説教に先立つ聖母出現物語としつつも、書かれた時期の確証がつかめないからという理由で、論拠はない(38)。

グアダルーペの聖母崇拝の確立の時期に関しては、16世紀中葉には既に聖母が崇められていたとしか述べられていない(39)。また、どのような人々がグアダルーペの聖母を崇拝していたかについては、大司教モントゥファルの『1556年の調査報告書』などの史料を論拠にして、16世紀中葉にインディオやスペイン系の人々が崇拝していたことを明らかにした。ただし、インディオにとっては、アステカ時代の神々の母トナンツィン像崇拝の延長で(40)、スペイン系の人々にとっては、日曜日のテペヤックの丘の参拝は、家族そろってのミサ付きピクニックであった、と記している(41)。そしてスペイン系の人々の聖母崇拝に関する16世紀の記録がほとんど残っていないのは、崇拝が17世紀の初めまではもっぱら一般庶民のものであって、知識人が関心を寄せる話ではなかったからだ、と述べている(42)。さらにマサは副王エンリケスの書簡を分析した結果、その内容に曖昧な点があるとして、それは知識人が崇拝について十分把握していなかった証である、と指摘している(43)。17世紀に入り、植民地生まれであることに絶望感を抱き始めたクリオージョは、インディオ的な要素すなわちメキシコの独自性を持つグアダルーペの聖母崇拝に注目し始めた、とし、この時期のグアダルーペの聖母崇拝に新たな展開があったことにも言及している(44)。

オゴールマンもグアダルーペの聖母出現の伝承物語の成立を16世紀としており、マサと同様にバレリアーノの聖母物語をグアダルーペの聖母出現の伝承物語誕生の由来とみなしている(45)。マサと異なるのは、バレリアーノの聖母物語は1556年に書かれた、と年代まで記し

ている点であり(46)、『アタバールの響き』に関しても1548年以前に作られた物語であると言及している点である(47)。しかし後者はグアダルーペの聖母出現物語を語ったものではなく、別の聖母マリアの聖母出現物語であるとし、この点、マサやトレとは全く異なる考え方である(48)。『出現に関する初期の物語』については、なんら言及していない。

オゴールマンの特色は、大司教モントゥファルによる「意図的演出」説を力説する点である。修道士を簡単には受け容れないインディオの足を教会に向けさせる目的で、1555年か1556年頃に第二代大司教モントゥファルが故意にテペヤックの丘の教会の近くに聖母像を隠し置かせたとし、それがグアダルーペの聖母崇拝の起源である(49)、という独自の考えを論じている。ただし、これはあくまでも推論に過ぎないことをオゴールマン自身が認めている(50)。

オゴールマンは、グアダルーペの聖母崇拝の普及に関してもマサとは異なるユニークな考えを示している。大司教モントゥファルの意に反し、グアダルーペの聖母崇拝はスペイン本国人のあいだでひとまず広まった、と言うのである。彼は、『1556年の調査報告書』や1575年の副王の書簡を論拠とし、テペヤックの丘にグアダルーペの聖母像が置かれた直後に牧場主によって語られたグアダルーペの聖母の奇跡の話に煽られ、スペイン本国人のあいだには急速に広まった、としている(51)。一方、インディオに関しては、大司教がグアダルーペの聖母像を隠し置かせた直後に書かれたバレリアーノの聖母物語は、直ぐにはインディオの耳に届かず、実際に彼らの聖母崇拝の普及にその物語が貢献したのはそれが広く世に出る17世紀以降のことで、まずメキシコ市あるいはテペヤックの丘近くに住むインディオに広がり、その後、既に1531年に出現していた聖母の崇拝と並んでゆっくりとその他の地域のインディオへ伝わっていったと考えている(52)。そして17世紀中葉にラッソ・デ・ラ・ベガによって出版されたバレリアーノの聖母出現物語は、インディオに影響を与えたのみならず、グアダルーペの聖母崇拝のクリオージョのあいだの普及にも影響したとオゴールマンは結論付けている(53)。

つぎに、「グアダルーペの聖母物語の成立」を17世紀と唱えるのはラファーユ、フロレスカーノ、プール である。

ラファーユは、1648年のサンチェス神父の説教以前にグアダルーペの聖母の出現についてその詳細を述べたものはないとし、この聖母出現物語の成立をサンチェス神父の説教と結びつけている(54)。またこの説教は16世紀中葉から祀られていたテペヤックの丘のグアダルーペという名の「聖母」をクリオージャとして生まれ変わらせ(55)、それがメキシコの国民的シンボルとなる「グアダルーペの聖母」崇拝の確立であったと論じている(56)。

ラファーユは、『1556年の調査報告書』や1575年の副王の書簡を論拠として16世紀中葉に広まりつつあったグアダルーペの「聖母マリア」がインディオやスペイン系の人々のあいだで崇拝されていたが(57)、これはインディオにとってアステカ時代の神々の母トナンツィン神であり、スペイン系の人々にとってスペインのエストレマドゥーラのグアダルーペの聖母マリアであったことを記した(58)。そしてそれが16世紀の最後の四半世紀に祝いの日や聖母像が変化し、メキシコ色の濃い土着化した聖母と変化していったというふうに1648年以前のグアダルーペと名付けられた聖母崇拝を描いている(59)。これらの変化は植民地でも本国の

「デ・ラ・コンセプシオンの聖母」や「ロレートの聖母」を崇めていた一部のスペイン本国人にとっては不快な出来事を意味するものであったが、クリオージョにとっては、いわゆる現在の「グアダルーペの聖母」への変容であったと推測している(60)。この聖母の土着化に続く、サンチェス神父の1648年の説教によるクリオージャの聖母の誕生が、クリオージョにとっての真のグアダルーペの聖母崇拝の確立であるとラファーユは結論付けている。彼は、グアダルーペの聖母崇拝が1648年以前の聖母崇拝とは異なるものであるとし、明確に区別している。

フロレスカーノは、ラファーユのように、サンチェス神父の説教がグアダルーペの聖母物語の成立であったという明確な表現はしていない。しかし、その当時伝承されていた話をもとにサンチェス神父が説教の中に聖母出現物語を書き、それがグアダルーペの聖母出現物語として初めて活字となったものである、と説教書の意義を認めている(61)。

ところで彼は、グアダルーペの聖母崇拝の確立はサンチェス神父の説教書が印刷される以前であると考えている。彼は、『1556年の調査報告書』を中心に分析して、テペヤックの丘の教会に初めはスペイン本国の聖母マリアが祀ってあったが、16世紀中葉にはテペヤックの奇跡を起こす聖母の話が一般化して、その聖母崇拝がインディオ独自のものとなったと述べている(62)。その過程で、インディオはアステカの神々の母、トナンツィン神とスペインの聖母マリアを重ねていったが、それがメキシコ独自の要素を持った「グアダルーペの聖母」の誕生につながったと指摘している(63)。

そして上述のようなインディオによるグアダルーペの聖母の土着化に加え、1575年頃から1600年頃にかけてテペヤックの丘の教会の聖母像が変わり、その後それまでスペインのエストレマドゥーラの聖母の祝日におこなわれていたグアダルーペの聖母の祝いの日も別の日になったこと、また17世紀に入るとグアダルーペの聖母出現を新約聖書の黙示録第12章の内容に合わせて説明したこと(64)を、クリオージョによる聖母のメキシコ化であり、聖母をより神聖なものとするための努力で、これらのクリオージョの努力がグアダルーペの聖母をメキシコ社会をひとつにする絆に変えた、と分析している(65)。フロレスカーノは、インディオによるグアダルーペの聖母崇拝の16世紀中葉の確立に続く崇拝発展の一過程として、この時期を捉えている。これはグアダルーペの聖母崇拝の確立とクリオージョを結びつけるラファーユとは多少見解が異なる。

プールは、グアダルーペの聖母出現物語の成立および崇拝の確立の時期、あるいは1648年を境とし、それ以前と以後とで聖母崇拝が異なるとする点などに関してはラファーユとほぼ同意見であるが、インディオによるグアダルーペの聖母崇拝のはじまった時期に関してはラファーユとも見解が異なる(66)。プールによれば、17世紀に始まったクリオージョの聖母崇拝は、1736年の疫病事件、翌年のグアダルーペの聖母の守護聖母という称号の取得やその後の法王による聖母崇拝の認知などいくつかの重要な事象を経て、18世紀以降にインディオに普及したのである(67)。

プールの見解の論拠は基本史料に対する厳しい評価にも基づいている。『アタバールの響き』に関しては、これはグアダルーペの聖母の物語ではなく、作者もブラシドかどうか明らかではないと考えている(68)。『出現に関する初期の物語』についても、作者や書かれた時

期が不明であるとし(69)、また『グアダルーペの聖母出現の物語』の作者は16世紀のバレリアーノではなく17世紀のラッソ・デ・ラ・ベガであるとしている(70)。さらに『1556年の調査報告書』に関しては、当事者であるブスタマンテ神父の説教のオリジナルが失われており、ブスタマンテ神父の言動は大司教モントゥファルの一方的な調査に基づくしかないとし(71)、また副王エンリケスの書簡はグアダルーペの聖母出現や奇跡について触れていないと述べるなど、これらの史料の信憑性に疑問を投げかけている(72)。このように1648年以前のすべての史料に関して、他の研究者とはかなり異なる評価をしているのである。

以上、グアダルーペの聖母物語の成立および崇拝の確立の時期や聖母崇拝の中心となっていた人々などに関する20世紀中葉以降の研究者の見解を簡単に整理してみた。

現段階で明らかになっているテペヤックの丘の聖母崇拝に関連する史実は、16世紀中葉には既に教会堂があり、そこで聖母マリアが崇拝されていたことであろう。そのテペヤックの丘のグアダルーペの聖母崇拝の確立に関して、1531年からとする見解、16世紀中葉以降とする見解、また1648年以降とする見解が挙げられている。さらに主にインディオによる崇拝であった、あるいは、スペイン系の人々による崇拝でもあったとする見方に分かれており、論拠も様々である。特に近年、グアダルーペの聖母崇拝の確立は17世紀であった、と結論付ける傾向にある。オゴールマンやプールのように、グアダルーペの聖母崇拝とスペイン系の人々（クリオージョ）の関連を強調し、グアダルーペの聖母崇拝がインディオに普及したのは17世紀、あるいは18世紀であった、とする最近の研究は興味深い。

5. おわりに

グアダルーペの聖母物語の主役、フアン・ディエゴを聖人フェリーペ・デ・ヘススに次ぐ二人目のメキシコ人聖人としようとする努力は現在も続いている(73)。1996年末に、グアダルーペ研究センター長であるオラシオ・センティエス・ロドリゲスが「フアン・ディエゴの出生等を立証する資料を発見した」と発表し(74)、また翌1997年にはイエズス会のハビエル・エスカラーダ神父が「フアン・ディエゴの実在およびグアダルーペの聖母の出現を立証するコディセ（古文書）を発見した」と発表した(75)。これらの発見に対する評価は難しい。現段階では、フアン・ディエゴが実在したのかどうかも立証できないままであると言わざるを得ない。さらに、聖母の出現に関する論争は現在も続き、また聖母物語の成立の時期や初期の崇拝の実状に関しても見解が分かれたままである。

そして1997年の夏、メキシコ市内の某地下鉄駅構内の壁面にグアダルーペの聖母が姿を現したという噂が毎週のように流れ、話題となった(76)。かつてのテペヤックの丘に、現代の近代的な教会堂とともに16世紀および17世紀の石造りの教会堂を持つグアダルーペ大寺院は、同年12月12日の聖母の祝日の参拝者数を400万人以上と推定した(77)。メキシコのグアダルーペの聖母崇拝は健在と言えよう。

【註】

＊宗教関係の用語の訳に関しては、ヘルマン・テュヒレ他『キリスト教史』上智大学中世思想研究所編

訳/監修、1997の巻末の用語解説にある日本語訳を参考とした。
＊翻訳本が出版されていない欧文著書の書名に関しては、必要に応じて筆者が日本語訳をした。

(1) 日本では鶴見俊輔著『グアダルーペの聖母』がグアダルーペの聖母崇拝を扱っている。
(2) 筆者の知る限りでは、フランシスコ・デ・ラ・マサが「インディオとともにスペイン系の人々もテペヤックの丘の教会に通っていた」ことを1953年に認めている。しかし、基本的にはインディオによる聖母崇拝とするという見解が主流を占めていた。1970年代になり、ラファーエルを代表としてグアダルーペの聖母崇拝がスペイン系の人々、特にクリオージョの崇拝である、とする見解が強くなっている。フィデール・デ・ヘスス・チャベット神父も「16世紀のグアダルーペの聖母崇拝は、改宗したばかりのインディオによる崇拝と考えられているようだが、インディオばかりではなくスペイン系の植民者の崇拝でもあった」と1978年に指摘している。Fray Fidel de Jesús Chauvet, *El culto guadalupano del Tepeyac. Sus orígenes y sus críticos en el siglo XVI*, p.17. Jaques Lafaye, *Quetzalcoatl y Guadalupe*, p.325, Francisco de la Maza, *El guadalupanismo mexicano*, p.17.
(3) 「出現」という言葉に関しては、シルビィ・バルネイ著『マリアの出現』を参照。
(4) Edmundo O'Gorman, *Destierro de Sombras* を参照。
(5) Stafford Poole, *Our Lady of Guadalupe* を参照。
(6) 参考文献は次のとおりである。Faustino Cervantes Ibarrola, *Álbum del 450 aniversario de las apariciones de Nuestra Señora de Guadalupe*; Mariano Cuevas, *Álbum histórico guadalupano del IV Centenario*; Jesús García Gutiérrez, *Primer siglo guadalupano. Documentación indígena y española (1531-1648)*; Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, *Testimonios históricos guadalupanos*. ナワトル語はメキシコ中央高原の先住民族の一言語である。
(7) 参考文献は次のとおりである。Mariano Cuevas, op. cit.; Jesús García Gutiérrez, op. cit.; Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, op. cit., Xavier Noguez, *Documentos guadalupanos*. 公文書は公的な機関が記録した資料あるいは公的立場で書かれた記述などである。
(8) スペイン語の原文は、Francisco de la Maza, *El guadalupano mexicano*, p.9, 日本語訳は拙稿「メキシコの聖母グアダルーペに関する『1556年の調査報告書』について」『名古屋短期大学紀要』No. 35、p.68 を参照した。
(9) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.11. ナワトル語の題名は、Edmundo O'Gorman, Op. cit., p.17 を参照。クエバス神父は、Teponaxtli というナワトル語の訳語を当てている。Mariano Cuevas, op. cit., p.23.
(10) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.23; Fortino Hipórito Vera, *Tesoro guadalupano*, pp.5-8.
(11) Mariano Cuevas, op. cit., p.23.
(12) 現在メキシコ市中央に位置する大聖堂は、1573年に建設を開始し、200年以上かかって再建されたものである。したがってこの詩が16世紀半ば以前の作であれば、詩に書かれている教会は最初の大聖堂のことであろう。
(13) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.24、拙稿「メキシコの聖母グアダルーペの崇拝に関する『1556年の調査報告書』について」p.68.
(14) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.24.
(15) 大司教という言葉が記述されているが、当時のメキシコ市には大司教はまだいなかった。因みに、スマラガ神父がメキシコ初代大司教となったのは1546年のことである。この点で史料の信憑性を問われるが、初期の伝承内容が記録される時点までに変わった可能性もあり、またスペイン語への翻訳時の誤訳も考えられるが、この矛盾の原因は明らかではない。
(16) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., pp.26-35.
この物語は、最初の手書きのオリジナルが作者の死後、フェルナンド・デ・アルバ・イシュトゥリルソチトゥルの手にわたり、彼が未完であった物語を完成させ、そしてその後、シグエンサ・イ・ゴンゴラの手に渡ったと言われている。
(17) 17世紀の文人、シグエンサ・イ・ゴンゴラは、Nican mopohua...で始まるナワトル語で書かれた

手書き原本を入手し、筆跡からバレリアーノが作者であると証した。さらに20世紀になり、アンヘル・マリア・ガリバイ神父がナワトル語の文体から16世紀の作品であることを認めたため、それが定説となった。しかし近年になり、16世紀のオリジナルが残存していないことなどから、17世紀に物語を出版したラッソ・デ・ラ・ベガが作者であると主張する研究者が現れた。

(18) 1931年、ヘスス・ガルシア・グティエレス神父が、「インディオが残した史料は少ない上に、ナワトル語からスペイン語への訳文が様々で、史料を引用する場合に、研究者が自分の立場、判断で最も良いと思われる訳をしたり、訳させたりしていたため、一つの史料に対して複数のスペイン語翻訳が存在している。これはひとつの資料が異なる内容の実証のために役立つということではなく、２種類以上の訳し方をされてきたということである」と述べている。またトレ・ビジャールも19世紀後半の有名なナワトル語翻訳家、ファウスティーノ・ガリシア・チマルポポカの誤訳を指摘している。Jesús García Gutiérrez, Op. cit., p.8, Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.24.

(19) Fray Fidel de Jesús Chauvet, Op. cit., pp.26-35; Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., pp.45-72、拙稿「メキシコの聖母グアダルーペの崇拝に関する『1556年の調査報告書』について」、pp.70-74.

(20) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Loc. cit., 拙稿同上書同上頁を参照。

(21) 1555年から1556年にかけて、第二代大司教モントゥファルがテペヤックの丘に教会堂を建てたが、それ以前に既に小さな教会堂があったようで、16世紀中葉のフランシスコ・セルバンテス・デ・サラサールが『1554年のメキシコ』でテペヤックに白壁の小さな教会堂があったことを記している。Francisco Cervantes de Salazar, *México en 1554*, p.139.

(22) Actas de Cabildo de la ciudad de México, メキシコ市参事会議事録（旧市参事会資料室所蔵）。

(23) 1571年5月8日付の市参事会議事録に「金貨2,202トミンをスペインへ送金するが、そのうちのグアダルーペの聖母のコフラディーア分から金貨2,000ペソを当市の財産管理担当のアギラール・アセベドの旅費とする」旨が記されている。この史料の金額については疑問点がみられる。まず、トミンは重量の単位、ペソは貨幣単位である。しかしヌエバ・エスパーニャの16世紀から18世紀は現在のような貨幣管理形態を取っておらず、当時の貨幣流通の詳細は明らかではない。さらに、議事録の数字記載ミスも考えられ、具体的な金額は不明である。しかしこの議事録から、当時既にスペインへの送金の事実があったことは認められよう。

(24) 一般には、グアダルーペの聖母の教会は、Iglesia de la Nuestra Señora de Guadalupe と記されているが、ここではcasa de la Nuestra Señora de Guadalupeとなっており、教会を指すのか宿泊先を指すのか明らかではない。

(25) 1575年5月15日付書簡。

(26) Alicia Bazarte Martínez, *Las cofradías de españoles en la ciudad de México (1526-1869)*, p.46.

(27) 参考文献は次のとおりである。Miguel Sánchez, *Imagen de la Virgen María Madre de Dios de Guadalupe*; 北条ゆかり「グアダルパニスモの理論的唱導者、ミゲル・サンチェス：その著作と歴史的背景」『彦根論叢』第306号など。

(28) サンチェス神父に続く出版物は次のとおりである。Luis Lasso de la Vega, Op. cit.; Luis Becerra Tanto, *Origen milagroso del Santuario de Nuestra Señora de Guadalupe*; Carlos Sigüenza y Góngora, *Primavera indiana*; Francisco de la Florencia, *La estrella del norte de México* など。

(29) Xavier Noguez, Op. cit., pp.124-131, Ana María Sada Lambretón, *Las informaciones jurídicas de 1666 y el beato indio Juan Diego* を参照。

(30) ヘルマン・テュヒレ他『キリスト教史』上智大学中世思想研究所編訳/監修では、保護聖人、保護聖母となるようであるが、ここでは守護聖母とした。

(31) José Servando Teresa de Mier Noriega y Guerra, 'Sermón guadalupano', en *Testimonios..* por Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, pp.730-757; David Brading, *Los orígenes del nacionalismo mexicano*, pp.43-95 を参照。

(32) Joaquín García Icazbalzeta, *Carta acerca de la imagen de Nuestra Señora de Guadalupe de México*, p.131.

(33) スペイン語副題、Tesoro guadalupano. Noticia de los libros, documentos, inscripciones &c. que

tratan, mencionan ó aluden a la aparición y devoción de Nuestra Señora de Guadalupe.

(34) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., p.37.

(35) 'La relación primitiva de las apariciones' (1541-1545), 'Nican mopuhua' などを紹介している。

(36) Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, Op. cit., pp.7-19.

(37) Francisco de la Maza, Op. cit., p.25.

(38) Ibid., pp.32-35.

(39) Ibid., p.14.

(40) Ibid., pp.17, 22-23、テペヤックの丘には神々の母トナンツィン像が1694年まで密かに祀ってあったことを他の史料から指摘している

(41) Ibid., p.18.

(42) Ibid., pp.38-39.

(43) Ibid., pp.25-26.

(44) Ibid., p.40.

(45) Edmundo O'Gorman, Op. cit., pp.49-50.

(46) Loc. cit..

(47) Ibid., p.17.

(48) Ibid., p.59.

(49) Ibid., pp.20-21.

(50) Ibid., p.39.

(51) Ibid., p.148.

(52) Ibid., pp.59-60.

(53) Ibid., p.61.

(54) Jaques Lafaye, Op. cit., pp.342-345.

(55) Loc. cit..

(56) Ibid., p.350.

(57) Ibid., p.325.

(58) Ibid., pp.303-311, 328.

(59) Ibid., pp.328-333. ラファーエによれば、初めはスペインのエストレマドゥーラのグアダルーペの聖母が祀られていた。

(60) Ibid., p.324. グアダルーペの聖母のメキシコ化に関しては、聖母像の変史はp.331を、聖母の祝日の変更はp.343を参照。

(61) Enrique Florescano, p.188.

(62) Loc. cit..

(63) Ibid., p.185.

(64) Ibid., p.187.

(65) Ibid., pp.187-188.

(66) Stafford Poole, Op. cit., pp.7, 214-217.

(67) Ibid., pp.2-3, 218.

(68) Ibid., p.44.

(69) Ibid., pp.40-43.

(70) Ibid., pp.7, 43, 46.

(71) Ibid., pp.58-60.

(72) Ibid., pp.71-77.

(73) 拙稿「メキシコ『聖フェリーペ・デ・ヘスス』に関する一考察」『ラテンアメリカ研究年報』No.16、pp.60-96 を参照。

(74) 'El cronista de la Villa de Guadalupe dice que, por su investigación, el Vaticano aceptó el proceso para santificar a Juan Diego' por Rodrigo Vera en *Proceso*, No.1049(08 de dic. de 1996), pp.60-61.

(75) 'Nació en 1474, se llamaba Cuautliyztactzin, tenía un palacio en Cuautitlan y lleva al menos 36

milagros' por Rodrigo Vera en *Proceso*, por JEP No.1101(07 de dic. de 1997), pp.22-28.

(76) 'Las apariciones. Virgen de los veranos' en *Proceso* No. 1090(21 de sep. de 1997), pp.54-57.

(77) *La Jornada*, 12 de dic. de 1997.

主要参考文献

（日本語文献）

ヘルマン・テュヒレ『キリスト教史』上智大学中世思想研究所編訳第７～８巻、平凡社、1997年。

鶴見俊輔『グアダルーペの聖母』筑摩書房、1976年。

シルビィー・バルネイ『マリアの出現』近藤真理訳、せりか書房、1996(1992)年。

北條ゆかり「グアダルパニスモの理論的唱導者、ミゲル・サンチェス：その著作と歴史的背景」『彦根論叢』第306号、1997年。

拙稿「メキシコの聖母グアダルーペの崇拝に関する『1556年の調査報告書』について」『名古屋短期大学紀要』No. 35、1997年。

拙稿「メキシコ『聖フェリーペ・デ・ヘスス』に関する一考察」『ラテンアメリカ研究年報』No. 16. 1996年。

（外国語文献）

Bazarte Martínez, Alicia, *Las cofradías de españoles en la ciudad de México (1526-1869)*, México, UAM, 1989.

Becerra Tanto, Luis, *Origen milagroso del Santuario de Nuestra Señora de Guadalupe*, México, Viuda de Bernardo Calderón, 1666.

Brading, David, *Los orígenes del nacionalismo mexicano*, México, Ediciones Era, 2a reimp. 1993(1973).

Cervantes de Salazar, Francisco, *México en 1554*, México, UNAM, 1939.

Cervantes Ibarrola, Faustino, entre otros, *Álbum del 450 aniversario de las apariciones de Nuestra Señora de Guadalupe*, México, Ediciones Buena Nueva, 1981.

Chauvet, Fidel de Jesús, El culto guadalupano del Tepeyac. Sus orígenes y sus Críticos en el Siglo XVI en apendice; La información de 1556 sobre el Sermón del P. Bustamante, México, Centro de Estudios Bernardino de Sahagún, A.C., 1978.

Cuevas, Mariano, *Álbum histórico guadalupano del IV Centenario*, México, Escuela Tipográfica Salesiana, 1930.

Florencia, Francisco de la, La estrella del norte de México. Historia de la milagrosa imagen de María Santísima de Guadalupe ..., Guadalajara, Imprenta de J. Cabrera, 1895(1688).

Florescano, Enrique, *Memoria mexicana*, México, Contrapuntos, 1987.

García Gutiérrez, Jesús, *Primer siglo guadalupano. Documentación indígena y española (1531-1648)*, México, Secretaria del Arzobispado de Méjico, 1931.

García Icazbalceta, Joaquín, *Carta acerca del origen de la imagen de Nuestra Señora de Guadalupe de México*, México, Miguel Ángel Porrúa, S.A., 1982 (1896), Colección Aniversario IV.

Hipórito Vera, Fortino, *Tesoro guadalupano Noticia de los libros, documentos, inscripciones &c. que tratan, mencionan ó aluden a la aparición y devoción de Nuestra Señora de Guadalupe*, Amecameca, Imprenta del Colegio Catórico, 1887.

Lafaye, Jacques, *Quetzalcóatl y Guadalupe. La formación de la conciencia nacional en México*, México, FCE, reimp.1995 (1974).

Lasso de Vega, Luis, *Huei Tlamahuizoltica*, México, Carreño E Hijo, Editores, 1926(1649).

Maza, Francisco de la, *El guadalupanismo mexicano*, México, FCE, reimp. 1984 (1953), Col. Lecturas Mexicanas 37.

Noguez, Xavier, *Documentos guadalupanos. Un estudio sobre las fuentes de información tempranas en torno a las mariofanías en el Tepeyac*, México, FCE, reimp. 1995(1993).

O'Gorman, Edmundo, *Destierro de Sombras. Luz en el origen de la imagen y culto de Nuestra Señora de Guadalupe del Tepeyac*, México, UNAM, 1991(1986), Col. Instituto de Investigaciones históricas (Serie

Historia Novohispana 36).

Poole, Stafford, *Our Lady of Guadalupe. The Origins and Sources of a Mexican National Symbol, 1531-1797*, Arizona, The University of Arizona Press, 1995.

Sada Lambretón, Ana María, *Las informaciones jurídicas de 1666 y el beato indio Juan Diego*, México, Hijas de María Inmaculada de Guadalupe, 1991.

Sahagún, Bernardino de, *Historia General de las cosas de Nueva España y fundada en la documentación en lengua mexicana recogida por los mismos naturales*, México, Editorial Porrúa, S.A., Col. Sepan cuantos 300.

Sánchez, Miguel, *Imagen de la Virgen María Madre de Dios de Guadalupe, milagrosamente aparecida en la Ciudad de México, celebrada en su historia, con la profecía del capitulo doze del Apocalipsis*, México, Imprenta de la Viuda de Bernardo Calderón, 1648.

Sigüenza y Góngora, Carlos, *Primavera indiana, Poema sacro-histórico. Idea de María Santísima de Guadalupe de México, copiada de Flores...*, México, Ediciones Vargas Rea, 1945(1668).

Torre y Villar, Ernesto de la y Navarro de Anda, Ramiro, *Tetimonios históricos guadalupanos*, México, FCE, 1982.

Valeriano, Antonio, Nican mopohua(manuscrito), en *Tetimonios históricos guadalupanos* por Ernesto de la Torre Villar y Ramiro Navarro de Anda, México, FCE, 1982.

その他

Actas de Cabildo de la ciudad de México, 1524-1600.

La Jornada, 09 de jun. de 1996 y 12 de dic. de 1997.

Proceso, No. 1049(08 de dic. 1996), No. 1090(21 de sep. 1997), No. 1101(07 de dic. 1997).